



聞こえにくいと思ったら受診を 難聴

年齢を重ねるにつれ、「聞こえにくい」「聞き取りづらい」と自覚症状を訴える方も少なくないでしょう。

難聴には「伝音難聴」と「感音

難聴」があります。前者は音の振動を伝える経路の障害によつて起こり、主に耳の入り口から鼓膜とその先の耳小骨までとなつています。耳垢が詰まる耳垢塞栓や中耳炎などが原因として挙げられます。後者は音の振動を電気信号に変えて伝える耳小骨の先にある蝸牛から脳までの経路の障害です。加齢により音の振動が伝わる経路全体の機能低下がみられますが、主に神経にかかわる機能の低下であるため「感音難聴」に分類されます。加齢による難聴「加齢性難聴」は、ゆっくりと徐々に進行するので自覚しにくい、高い音から聞こえにくくなる、両耳が聞こえにくくなる、などの特徴があります。日常生活に支障が出てくるようであれば、補聴器の使用などを検討して



もよいでしょう。また聞き取りづらいことを周囲に知らせ、協力を得るのもよいでしょう。

その他生まれつき「聞こえ」の悪い「先天性難聴」、音を伝える神経が突然悪くなる「突発性難聴」、めまいを伴って発症することの多い「メニエール病」なども「感音難聴」に含まれ、特に発症後、長期間経過している場合は、残念ながら治療しても「聞こえ」はよくならないことが多いです。

これら「難聴の診断」のためには、耳鼻咽喉科の専門医に相談したり、市の聴力検診(43ページ)を受けたりするのがよいでしょう。